

ODU NEWS

大阪歯科大学広報

ODU NEWS No.156

2010年1月31日

目次

・創立100周年記念事業常任委員会設置	3
・第17回公開講座「特別講座」開催	3
・平成21年 秋の褒章・叙勲受章者	4
・寄 贈	4
・第41回 大学祭	4
・第5回 人権標語入賞者表彰	5
・平成21年度 自衛消防訓練	6
・平成21年度 教職員忘年慰労会	6
・技工士長の加地さん文部科学大臣表彰	7
・小正教授ほか新聞に記事掲載	7

・クリスマスコンサート・2009	8
・平成22年 新年互礼会年頭所感 理事長・学長 川添堯彬	9
・平成21年度日本歯科医学会会長賞 川添堯彬理事長・学長が授賞	22
・学位（博士）授与報告	22
・海外留学経験者特別採用制度実施へ	22
・人 事	22
・あとがき	24



第17回公開講座「特別講座」（ドーンセンター・平成21年1月21日）

創立 100 周年記念事業常任委員会設置

平成23年(2011年)11月11日(金)に開催される大阪歯科大学創立100周年記念式典に向け、その2年前となる11月11日に大阪歯科大学創立100周年記念事業常任委員会が設置され、本格的な取り組みがスタートした。同時に、100周年記念事業準備グループも設置され、具体的な記念事業の検討と準備にあたることとなった。

常任委員会委員長には、川添堯彬理事長・学長が就任し、副委員長として村上常務理事、新田常務理事、三谷理事、岡理事の4名が選ばれた。常任委員には、理事会から田治米理事はじめ5名の理事及び監事、大学から豊田副学長はじめ14名の主任教授及び専門学校長が就任し、事務局は田中法人事務部長はじめ5名が担当することになった。記念事業準備グループは、「記念式典等」「発祥の地記念碑設置」「記念事業募金」「講義室・自習室」「大学100年史・大学院50年史」「公開講座・講演会」に分かれて作業を進めて行くことになる。

大阪歯科大学創立100周年記念事業常任委員会

常任委員会委員長	川添堯彬理事長・学長
常任委員会副委員長	村上常務理事 新田常務理事 三谷理事 岡 理事
常任委員(理事会等)	田治米理事、橋本理事 伊達理事、下村監事 白神監事
(主任教授会等)	豊田主任教授、田中主任教授 大浦主任教授、堂前主任教授 神原主任教授、諏訪主任教授 覚道主任教授、福島主任教授 小正主任教授、森田主任教授 小谷主任教授、林 主任教授 上田主任教授
(事務局)	末瀬専門学校長 田中法人事務部長 中村大学事務部長 前野法人経理部長 東野病院事務長 松村総務課長

第 17 回公開講座「特別講座」開催

11月21日(土)午後1時から、天満橋の「ドーンセンター」において第17回大阪歯科大学公開講座「特別講座」が開催された。連休の初日にもかかわらず、150名近い参加者が訪れた。特別講座は、プレ100周年記念事業の一環として開催され、前病院長の井上 宏名誉教授と覚道健治病院長が講師を務めた。

井上先生は、「健康増進と生きがい(QOL)に貢献する歯科医療ーすべては8020運動から始まったー」という講演題で、平成元年に歯科医師会が中心となって始めた「80歳で20本の自分の歯を残す」ことを目標とする「8020運動」が、高齢者の健康と生きがいに貢献していることを様々なデータをもとに報告した。

また、覚道先生は「歯科医療100年の軌跡と未来」と題して、フォシヤールに始まる近代歯科医療の歴史をたどりながら、ここ100年の歯科医学における発明・発見と歯科治療の進展について人物を中心にエピソードまじえて報告し、歯科における再生医療の今後について展望した。



平成21年 秋の褒章・叙勲受章者

平成21年秋の褒章・叙勲において、大阪歯科大学関係者として以下の先生方が受章されました。

褒 章

大学 12 回 橋本 武 大阪府 藍綬褒章

叙 勲

大学 5 回	内海 順夫	関東支部	瑞宝中綬章
大学 7 回	大中文太郎	山口県	旭日双光章
大学 7 回	谷 嘉明	京都府	瑞宝中綬章
大学 8 回	宮尾 昌顕	和歌山県	旭日双光章
大学 9 回	赤司 範俊	長崎県	旭日双光章
大学 9 回	富永 才助	滋賀県	旭日双光章

寄 贈

下記の寄贈を受けましたので報告します。寄贈いただいた各位には心より感謝いたします。

・大阪歯科大学弓道部弓心会

創部 50 周年を記念して 平成 21 年 8 月 29 日 寄贈
記念樹一式 (624,750 円)

・パナソニックデンタル株式会社

平成 21 年 9 月 8 日 寄贈
1) パナラス C05Σ (炭酸ガスレーザメス)
評価額 3,950,000 円
2) P-Laser (半導体レーザメス)
評価額 4,400,000 円

第 41 回 大学祭

第41回大学祭が下記の日程で行われた。

体育祭：10月24日（土）

楠葉祭：10月31日（土）～11月1日（日）

今年は新型インフルエンザの影響で大学祭の開催が心配されたが、体育祭、楠葉祭ともに無事開催することができた。

体育祭は秋晴れの中牧野学舎で行なわれ、学生と教職員が一緒に競技に参加するなど和やかな雰囲気の中で、充実した一日を過ごした。

楠葉祭は音楽系クラブの演奏会がオープニングとなり、野外ではクイズ大会等のイベントが盛大に行なわれた。また、楠葉学舎開設より行なわれている無料歯科検診には毎年多くの方々が参加され、地域の皆さまと本学との深い交流の機会となっている。

2日目には、今年度第3回目の「オープン・キャンパス」が開催され、多くの参加者があった。恒例の大抽選会を最後に第41回大学祭は無事終了した。



大学祭に開催されたオープン・キャンパスの様子

第5回 人権標語入賞者表彰

毎年、人権週間（12月4日～10日）に合わせて、人権啓発推進委員会が人権啓発標語の募集を行っています。第1学年生の応募者が毎年増え、今年は初めて応募件数が100点の大台を超えました。応募者も昨年の46人から今年は123人になり、一人で複数の作品に応募される方も多くいました。

川添学長はじめ4名の委員による厳正な選考の結果、下記のとおり入選作品が決定し、12月16日楠葉学舎で表彰式が行われました。

表彰名	氏 名	作 品
最優秀	太田 英美	考えよう 人の存在 考えよう 人の気持ち 考えよう 命の重さ
優 秀	岩本 行弘	広めよう 人と人との 心の輪
優 秀	坂本 和優	相手の気持ち 自分も同じ立場にね なった気分で考えよう
佳 作	上野 稜丞	侵してはいけない 人の権利 傷つけてはいけない 人のこころ
佳 作	小笠恵理子	君の勇気が 社会を変える！ 作ろうよ 世界に心の 虹色の橋
佳 作	岡澤 華衣	人と人 手と手をつなぎ 平和な世界
佳 作	竹内 友規	守ろう人権 なくそう差別 みんなの幸せ 守るため
佳 作	辰巳 真理	差別と偏見 皆で捨てよう 明るい未来のために
佳 作	中川 真希	大切にしよう 自分の気持ち 他人の気持ち
佳 作	西影 洋人	できるはず 人の気持ちを考えて なくして行こう 差別の心
佳 作	松尾 望	守っていますか守られてい ますか あなたの人権 みんなの人権
佳 作	関 理泓	ごめんねと言える勇気は心の 強さ、考えよう自分の言葉 相手の心
佳 作	山形 倖司	みんな違って みんな良い、 自分の個性を 大切に

入選者（氏名のみ）

麻生浩章、今津英之、大嶋秀典、大西亮太郎、小田紗矢香、梶野晃佑、加藤裕莉、北嶋沙織、酒井健二郎、坂口悟子、須川雄介、田川未紗、千地克弥、中道健人、中野真伍、深堀大輔、福森紫乃、村上和克、和唐薫子（以上第1学年）下田照子（大学庶務課）



最優秀賞の太田さん（中）・入賞した下田さん（下）

平成 21 年度 自衛消防訓練

平成21年度の自衛消防訓練が、11月12日(木)午後4時から楠葉学舎副門守衛室前において実施された。枚方東消防署員4名の立会いのもと、川添消防隊長以下約100名の教職員が参加し、本学の防火管理体制の充実を目的として行われた。

訓練は、前年同様5号館1階事務所内「給湯室」から出火したとの想定で、第一発見者が火災を発見し、大声で周辺に知らせ、火災発生を連絡する通報訓練から始まり、各要員が①避難誘導 ②警戒 ③搬出 ④工作 ⑤救助等の役割を果たしながら、速やかに副門守衛室前へ避難した。無事に各班が全員避難したことを確認した後、防災設備業者の指導のもと水消火器と屋内消火栓による⑥初期消火訓練を行った。消防署からおおむね良好との感想とともに留意点として、「実際の火災ではパニックに陥りやすくなるので、避難誘導班は大きな声で教職員（および学生）を避難誘導するように」との講評を受けた。

最後に、川添消防隊長から本日の訓練の成果を踏まえ火災予防に役立ててほしい旨の要請があり、訓練はすべて終了した。

天満橋学舎では、10月23日(金)午後4時から夜間の火災を想定した訓練、12月3日(木)午後4時から通常の自衛消防訓練を実施した。

牧野学舎では、12月25日(金)午後4時から自衛消防訓練を実施した。



楠葉学舎での自衛消防訓練

平成 21 年度 教職員忘年慰労会

12月28日(月)午後3時から、恒例の教職員忘年慰労会が「プラザ14」で開催され、250名を超える教職員が参加した。

開会の挨拶で川添理事長・学長は、半数以上の私立歯科大学が入学定員割れをおこすという厳しい状況の中で、この厳しい状況をむしろやりがいと捉え、これを乗り越え、来るべき創立100周年に向けて教職員の団結と協力を要請した。続いて村上常務理事の乾杯の音頭により忘年慰労会はスタートした。

しばらくの間、歓談のときが流れ、お楽しみ抽選会では、理事長賞（旅行券）が口腔外科第一講座の田伏先生、学長賞（商品券）が高齢者歯科学講座大学院の渋谷さんに贈られた。最後に、田中常務理事から中締め挨拶があり、様々な感慨とともに1年が終了した。



川添理事長の挨拶(上)・学長賞の渋谷さん(下)

技工士長の加地さん文部科学大臣表彰

平成21年度医学教育等関係業務功労者に歯科技工士長の加地公夫さんが推薦され、選考の結果、功労者に決定しました。11月25日に東京で表彰式が開催され、加地さんも出席し文部科学大臣表彰を受章しました。この章は、医学教育等の関係業務において特に功績が顕著な方々に贈られるものです。



川端文部科学大臣を中心に受章者記念撮影

小正教授ほか新聞に記事掲載

11月から12月にかけて、本学教員の記事が新聞に掲載されましたので紹介します。



○高齢者歯科・小正教授、読売新聞夕刊にコラム

11月16日（月）の読売新聞の「夕刊“わいず”倶楽部～おしえてドクター」に、高齢者歯科講座・小正 裕教授がドクター役として、中・高年の口腔ケアについて解説しました。



読売新聞の取材記事によるもので、その中で小正教授は、歯周病は糖尿病などの病気を悪化させ、高齢者は歯が少なく口腔が不衛生であるほど脳梗塞や癌のリスク

が高いことを指摘した上で、50～60歳代が一つの分かれ目で、この時期に歯と口腔のケアに努めることがそうした病気の予防にもつながるとしています。

また、高齢者は食べ物を噛んだり、飲み込んだりする機能が低下するため、特に「摂食・嚥下障害」の人は口腔を清潔にしていないと、食べ物やつばにまじって口の中の細菌が気管を経て肺に取り込まれ「誤嚥性肺炎」を起こしやすいと注意を促しています。予防のために、食事以外の時も口や舌を動かす簡単な「お口の体操」を勧めています。

○欠損補綴の岡崎教授、毎日新聞に「入れ歯を使う」

11月21日（土）の毎日新聞朝刊に、欠損歯列補綴咬合学講座の岡崎定司教授の「入れ歯を使う」が掲載されました。11月1日に毎日新聞社主催で開催された「高齢化と歯の健康シンポジウム」の内容をまとめたもので、大阪インプラント再生医療センター長の河村達也氏、タレントの森脇健児氏とともに岡崎教授も講演とパネルディスカッションに参加しました。



岡崎教授は、現代人の食事にかかる時間とかむ回数は弥生人の1/5程度になっており、1回の食事は11分で620回しかかまないことを紹介し、かむことは食べ物の消化を助けるだけでなく、大脳に刺激を与え、血液の循環を良くして思考力を高めると指摘。かむという重要な役割をもつ歯は、年齢とともに数が少なくなっていますが、それを補うことを「補綴治療」と言い、入れ歯（義歯）はそのひとつの方法で、日本人の入れ歯人口は3000万人とされています。

岡崎教授は、入れ歯の難点として「き・む・ず・か・し・い」と例えています。「き」は「気持ち悪い」、「む」は「虫歯になる」、「ず」は「ずれる」、「か」は「欠ける」、「し」は「しっかり手入れが必要」、「い」は「痛い」。そうした難点のある少し厄介な入れ歯ですが、自然歯の代役としてその役割を十分に果たすためには、歯ブラシや洗浄剤などを使って清潔に保つとともに、歯茎との適合性を調整するため1年に1回は歯科検診が必要です。

○小出病院教授ら診療での音声入力システム開発

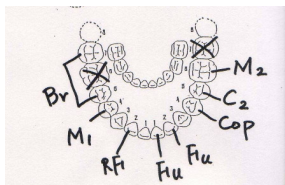
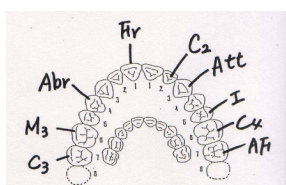
総合診療・診断科の小出武病院教授のグループが同志社大学の有田清三郎教授との共同研究で「歯科診療におけるパソコンへの音声入力システム」を開発しました。開発されたシステムの内容は、12月21日（月）の「日経産業新聞」の1面に掲載されました。



小出病院教授らが開発したのは、歯科診療において患者さんの歯の状態を検診する際、歯科医師の音声があるままパソコンに文字情報として変換できるようにしたものです。パソコンに音声認識ソフトと無線マイクなどを組み合わせたシステムに、歯科医師が1日30分1週間程度テスト発声してその医師の音声の特徴をソフトに認識させることにより、誤変換率を0.1%以下に抑えることに成功しています。これにより、従来の歯科医師の検診内容を歯科衛生士らが聞き取り、記録したものをパソコンにあらためてデータとして入力するという過程を省略することができ、電子カルテ化も容易になり、パソコン画面での患者説明も瞬時に行えるようになります。

小出病院教授は、今後1年をめどに実用化に向けさらにシステムの精度を高めて行きたいとしています。

音声入力の様子（米谷病院准教授）と入力例



クリスマスコンサート・2009

12月18日（金）午後6時より天満橋病院1階エントランスにおいて、有歯補綴咬合学講座の「更谷先生と楽しい仲間たち」による年末恒例となった「クリスマスコンサート・2009」が開催された。会場には、50名以上の皆さんが訪れ演奏に聞き入っていた。

二胡をメインとして英国民謡、歌謡曲からポピュラー音楽まで誰もが一度は聴いたことのある名曲10曲が演奏された。メンバーの息のあった演奏と更谷先生のパフォーマンスにより和やかなひとときを過ごし、訪れた多くの聴衆もご満悦であった。



更谷先生たちの演奏と集まった皆さん

平成 22 年 新年互礼会年頭所感

理事長・学長 川添 堯彬

みなさま、新年あけましておめでとうございます。最初に、本年の互礼会にご臨席くださいました、本学の教職員の方々、そして本学関係者の方、あるいは企業の方、本日は本当によくお集まりいただきました。厚く御礼申し上げます。



今、私はこの席におきまして、三つの感慨を深く胸に刻んでおります。一つは、本学の先輩方、多くの方々が、これまで99年もの長い歳月をこつこつと営んでこられ、そして築いてこられたこの実績に対しまして、満腔より感謝を捧げるとともに、大変誇りに思っております。二つ目は、昨今の歯科大学に対する逆風、あるいは苦境の重圧の中で、これを回復、改善すべく、自らに工夫や努力を行うチャンスを期せずして与えられましたことに、むしろやりがいと捉え、喜びを強く感じているのでございます。三つ目は、本日の互礼会に、お寒い中にもかかわらず、わざわざ、この楠葉の大学までお越しいただきましこと、そのみなさま方に対し、大変光栄に存じますとともに、感激で胸がいっぱいでございます。

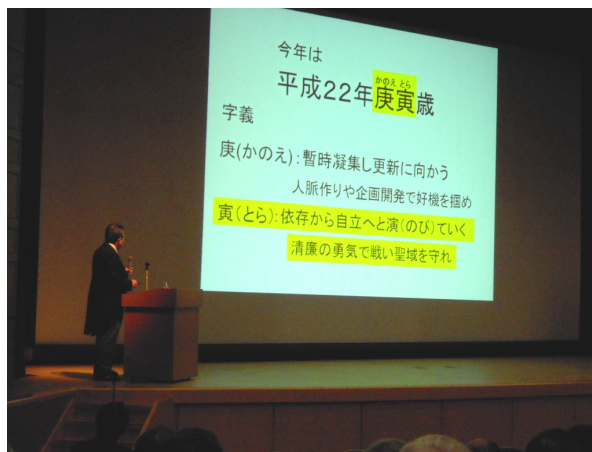
いよいよ来年には、私たち大阪歯科大学関係者が、こぞって終生の記念日と願う、創立100周年記念の時が、刻々と到来してまいります。この千載一遇の時を、私たちは誇りに思い、次なる「蓁々たる大樹へ」成長させることをお誓いいたしたいと思っております。

これから、しばし時間をいただき、これまでの大学改革の進捗状況、あるいはこれからの事業計画、あるいは残された課題につきまして、いつものように、パワーポイントで示したいと思っておりますので、ご静聴いただければありがたく存ずる次第でございます。

庚寅（かのえとら）は演（のびる）チャンス

昨年の干支から申しますと、昨年は「己丑（つちのとうし）」という年でございました。この字義を見ますと、「己」は温存と異変で淘汰される、あるいは「丑」は産みの時期まで辛抱を要すということで、確

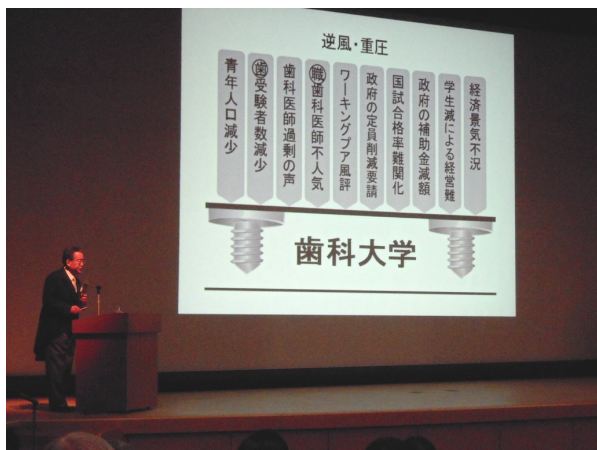
かに今思いおこしますと、あるいは私個人にとりましても、辛抱と昨年暮れに（昨年を象徴する漢字として）有名になりました「新た」、「新」ということがいくつかあったような気がいたします。今年は「庚寅（かのえとら）」という年にあたります。



庚寅という運勢は、近年珍しくといえますが、非常に良いことが多いといえますが、そういう運氣が出ているようでございます。まず「庚（かのえ）」の字義は、しばらく、暫時、凝集して留まってぐるぐる停滞して、その後には必ず更新に向かうという、要約するとそういう運氣でございます。従って人脈作りとか、企画や開発でいいチャンスもありますので、それを逃がすことなくうまくつかめば、いろいろ開けてくるのではないかと思います。一方、最近よくテレビやら新聞でも言っています「寅（とら）」ということですね。これは非常に勇猛果敢というか、全体としては寅年というのは依存の時から自立へと演（のび）ていく、「演」というのはさんずい編に寅と書く、「のびる」というふうに読まずようですけど、のびていくという運氣であるようです。それで一般的には、清廉の勇氣、あるいは猛烈の猛気で戦って聖域を守れと、そういうふうないろいろ積極的に行った方がいいというふうな感じがでているようでございます。

「10」の逆風 ～ 厳しい歯科大学の現状

ここからは、これまで方々で、繰り返し発言してまいりましたことですが、歯科大学を取り巻く環境は極めて厳しいということでございます。逆風、あるいは苦境の重圧がございまして、「10」ほど代表的なものをあげてみます。



まず、①18歳人口というか、青年人口の減少というのはここ10年この方、言われ続けてきましたけれど、ほぼ底に達しているわけでございます。②歯学部受験者数が非常に減少するというのも、昨年からの大きな動きとなっているわけでございます。それから、③歯科医師過剰の声というのは、方々でいろんな言い方があるようですが、そういう声が多々聞こえてまいります。真偽のほどはいろんな解釈があるようでございますけれども、そういうふうに使われています。④職業としての歯科医師の人気の悪い。歯科医師という職業に対して、こういったことを受けてかどうか知りませんが、いろいろな⑤ワーキングプアの風評とともに、マスメディアにおいても少し過剰気味に、集中的に逆風を投げかけてきています。中学生、あるいは高校生の進路指導の先生に聞きますと、どうも人気の、職業としての歯科医師の人気の悪い。従って、あまり、これを勧められないみたいな高校もあるようでございます。

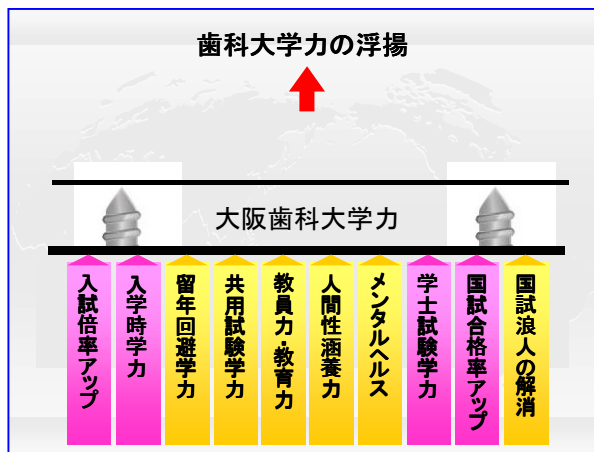
政府の方では、⑥定員削減をじりじりと、最初の原則通り、今のところは10%減ということで迫ってきていますが、さらには少し前からの数字で言いますと、半数に減らせというのが最終ゴールのようでございます。これは歯科大学にとっては存続にかかわる非常に厳しい問題であり、なんとか、これに抗して闘っていかないとけないということでございます。それから、⑦国家試験の合格率低く抑えるというか、だんだん問題を難しくしたり、あるいは相対評価をしたりして、厳しくしていく傾向にあるというのも、どうやら追い打ちをかけているようであります。それから補助金のことも関連してまいります。例えば定員が少

なくなりますと、その定員に応じて補助金の給付額が決まっているようでありまして、その定員が、これは定員割れであるとか、自動的に減ったとかあるいは減らされたとか、そのいずれに理由にかかわらず、⑧学生数が減った場合は補助金も確実に減らされます。現状は臨時定員といい、10年前、20年前の定員を定員増ということで増やしたのだから、元に戻しているだけなのだという言い方もするようです。一方、⑨私立歯科大学はこれ以上学生を減らすと経営難に陥るといわれており、大変苦しい状況にあるわけです。加えて、⑩経済不況が、ご承知のように景気がなかなか浮揚してくれないという問題もあります。過剰反応の部分もあるのですが、そういったことも含めてここにあげた「10」の逆風が、ひいては入試の時とか、あるいは募集の時におそってくるわけでありまして。

このように、つぶれられそうな感じで重圧がかかってきているのが昨今の状況かと思えます。

大阪歯科大学浮揚に向けて

こういった歯科大学と取り巻く厳しい逆風に対して、これをなんとか打開し、大阪歯科大学を浮揚させる方法はないのかということで、我々大学にいるものは懸命に、現状に呑み込まれるのではなくこれに抵抗する方策、本学の「大学力」を上げる方策を考えているわけでありまして。ここも10の要素に分類してありますけれども、本当はもっといくつかあるわけで、次々に試みる必要があるかと思うのですが、ここでは10の要素についていろいろトライしようとしている、またしてきた結果をお話したいと思えます。



このピンク色で示した、二つのファクター、すなわ

ち左の入口における「入試倍率アップ」「入学時学力」と右の出口における「学士試験学力」「国試合格率アップ」、この左と右に二つは、これは我々が分析した結果、車の両輪のように、最も効き目の強い「大学力」の浮揚になるというものでございます。逆に、それらは相互に関連しているため、一方が悪ければ翌年、他方に悪影響を及ぼすという悪循環に陥る関係性をもっていますので、まず教学における当面の目標を、やはり「入試倍率アップ」に置くことが必要だと考えています。入学時の学生の質といたしますか、学力を将来の国家試験をいうものを睨んで入れませんと、いくら教育力が上がっていても、厳しい国試状況を考えてとなかなかこの6年間で養成しにくいということがありますので、これをなんとかしないと。

もう一つは、卒業する時点での学力。本学では学士試験1と2というのを基礎と臨床について2回にわたってやっております。それを本試験と再試験でもって。この時の学力・成績と、国家試験の合格率が非常によく関連性を示している。相関的な関係にあるということ、もう、代々の教務部長も、学生部長もそれぞれ分析して結論を出しているところであります。そういう実績はあります。本学は、この時の学力を一応60点という平均点でもって、くくっておりますけど、他の大学ではこれを65点とか70点でないと卒業させないというところも増えてきているわけでありまして。国試合格率95%を狙うならば、学士試験での学力・成績でおおよそ合格率の数字が予測できるような状態でございますので、学士試験の基準を見直すことも必要かと考えています。ともかく、右の車輪で最も重要なことは、国家試験合格率のアップにつきます。

文部科学省の方でも、この浪人生も入れた全体的な国試合格率が60%を切ってきますと、この大学は歯科医師の養成機関として体をなしていないという見方をされて、募集人員をもっと減らせという感じになってくるわけですから、これは何としてもあげないといけない。しかし、国試浪人の問題はちょっと根が深く、もう20年も前、25年も前の人もまだおられるわけです。それらの人を一緒に入れますと、合格率はなかなか上がらないので、ともかく現役と1～2年の国試浪人の方を対象に据えて、学力の改善、アップを図ることを集約的にやってまいりました。そうすることで、翌年の募集ブランド力のアップにつながると考えたからであ

ります。それから、「留年回避学力」というのは、入って6年で卒業すればいいのですが、それが9年かかったり10年以上かかったりしますと、どうしても国試合格率に影響を与えてまいります。留年をさせないように学年ごとにしっかりとした学力をつけさせることが必要です。文科省は、やはり国試合格率60%から70%というところに敷居を置いているようであります。

最近特に、重要度が増しているのが「共用試験の学力」、CBTとオスキーということですね。1年生から学士試験までの実力、学力はまず、ここで試されます。そしてこれは、医科・歯科共通ですので、医科や医学部と比べられて、入試センターのところで全国2800人から3000人全員の受験生の1番から3000番の順位までいっぺんに出せる状態にあり、いつでも公開できるというふうに迫ってきております。今の段階では、その大学にしか知らせないということですが、ここで再試験を受けなければいけない人は、先が非常に危うく黄色信号がついている状態ですので、これをなんとかしないとイケない。それらを「教員力・教育力」でなんとかカバーしようと。

それから「人間性涵養力」は、日常の生活習慣というのが少し乱れている人はやはり成績に影響があるので、これも具体的に学生部の人を中心に積極的にやっております。また、卒業が近づいてきますと、「メンタルヘルス」といいますか、精神的に追い詰められる人が、だいたい、10年前より増えておりまして、これは助言教員とか指導教授、それからカウンセラー、そういった方々に適切に対応してもらっていますが、ひとり隠れたところで悩んでいて、もうやめたいとか自殺したいとか、そういう人も増えているのではないかと。これは、なにも歯学部だけじゃなくて、全国で自殺者が年間3万人も出ており、ヤングジェネレーションは総じてメンタル面での不安をもっているといえます。

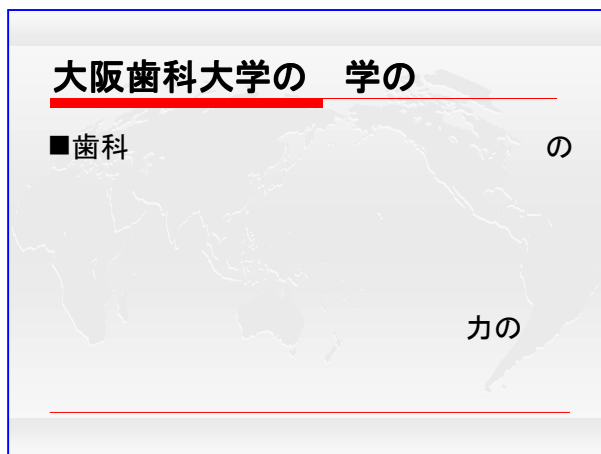
「国試浪人の解消」というのは、中期的目標に位置づけておりまして、まずここから左の方の、9つのところを、喫緊の問題として我々は取り組んでいるわけでございます。

建学の精神が教育の基本

それで、頒春、今年も幸運を捉えるぞということで、寅の運氣にあやかっ、この心意気で勇気を振り絞って大学改革に、教職員、それから理事の方々と一緒に

がんばっているわけでございます。

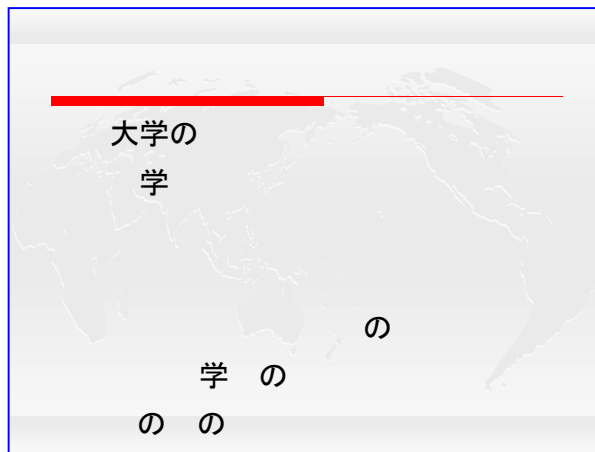
そして「建学の精神」、これは毎年出しているわけです。やはり原点は建学の精神でありまして、これは非常によくできているし、これに補足することはございません。どんなに制度が変わりまして、やはり本学は、ここに掲げた目標のために若者を鍛えていくわけでございます。



まず「専門的知識・技能」、これは当然歯科の専門の職業に就くわけでございますから、歯科の専門知識と技能、これが基本であります。その上で「研究意欲」を醸成しないといけない、このふたつは関連していますね。それからモチベーションという、強い「使命感」を持つという点、これになかなか苦労する。今のように豊かな時代に生まれて育っている人、また家が歯科医師である場合、そうした強い使命感もなく本学を選んでいる場合もあるということです。しかし、この社会における使命感、これに火がつきますと案外放っておいても勉強してくれますので非常に重要なファクターなのですが、どのようにしてそれを与えるかというのが結構難しい。それから、社会に対する「奉仕的人生観」、これは態度教育とか倫理、あるいは道徳心教育のような形で入学すると同時に病院を回らせたり、あるいは介護施設へ奉仕に行かせたりすることを行っていますが、今ではどの大学もやっていることであります。最後はやはり、医療倫理といいますか、歯科医師は人間を扱うわけですから、健康とか積極的な活動力に加えて、やはり「情操豊かな人間形成」ということとなりますが、これは我々のところでも特に重要視しています。

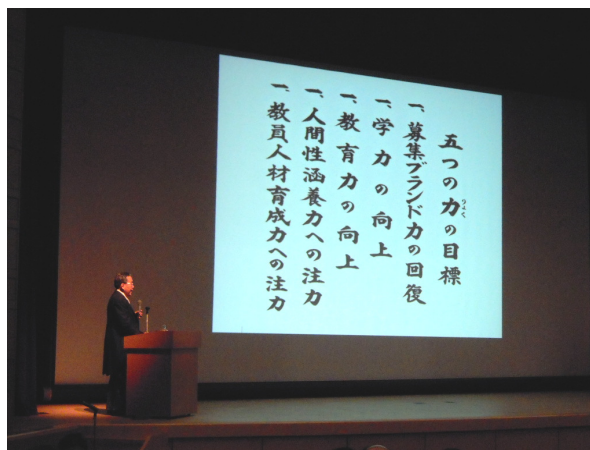
事業計画を振り返って

昨年まで、平成19年度から21年度までの事業計画は、ほぼこの大きい文字の「Ⅰ」から「Ⅶ」までの大きなくくりについて検討し実行してきましたし、またそれについて評価してまいりました。



これはその後も変わらないのでありますが、ただこれだけを漫然とやっていたのでは、今の世の中のテンポでは大学力がアップしない、浮揚しないということです。ですので、この中から特別な重点計画、重点事業計画を昨年はいくつか選んで、それについてやって参りました。その達成状況であります。ただし、そのいくつかの重点計画のうち今年はさらに重点の中の重点といえますか、喫緊の問題の事業計画と少し中期的な計画とに大別して取り組んでいかないと、そして的を絞った喫緊の問題に全パワーを注ぎ込まないと効果が上がらないと考えています。

まず、平成20年度から重点計画に挙げたのは、教学における「5つの力(りょく)の目標」ということです。

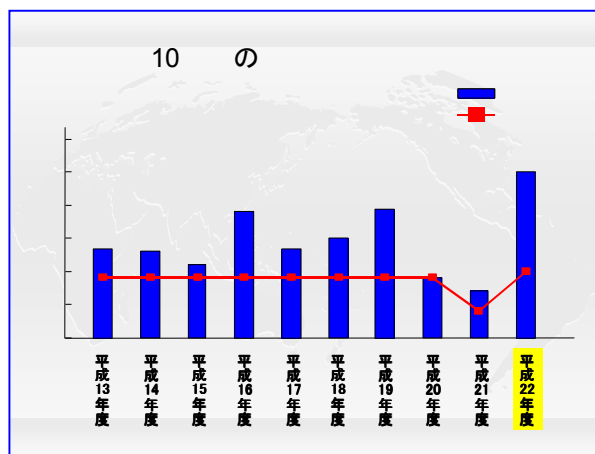


校門にも、1階のフロアにも掲げてあります。そこに挙げた5つの力の中で、「募集ブランド力」というのは入試ですね。それから、「学力の向上」というのは、入学時の一次学力、共用試験時の二次学力、学士試験時の三次学力とありまして、三次学力はやはり国家試験の学力へと繋がるわけでありまして。先生方については「教育力の向上」により、学生の学力だけでなく「人間性涵養力」も高めてもらいたい。それからまたあとで抄出しますけれど、「教員人材育成力」というのも怠ってはいけません。これから10年ぐらいの間に、20数人の教授が定年で入れ替わる。その後、それぞれの講座の教員構成がピラミッドのような形で続いているのですけど、どの一つの講座でもアンバランスになりますと、これは非常にパワーが落ちることになります。教員人材というのは、すぐには育成できるものではありませんし、教育効果を発揮できるものでもありません。やっぱり10年がかかりますので、今から手を打っておかないと。次世代に向けて有為な教員を育成していく、もちろん事務職員の人材も育成していきますが、まず重点としてはそういうことになろうかと思えます。

次に学納金の改正であります。この成果は少しずつできています。まず、平成21年、昨年4月1日から授業料を値下げしましたが、割合いい時期に実施したということでだいぶ話題になりました。本学に続いて過去1年間に3～4校の私立大学が学費を値下げしました。東京の大学はすでに早くから下げてあったわけですけど、本学の場合、いろいろ理事会で検討していただきこれまでより250万ほど安くしたということで、この効果がいろんなところに表れているのではないかと。特に地方から本学を受験しようとする学生は、下宿しなければならないということもあり、授業料の軽減は非常に重要なファクターになるのではないかと、これはもう手を打ちましたので効果を待つわけでありまして。

今年本学に一つ喜ばしい異変が生じました。授業料値下げの効果がどうかわかりませんが、これは過去10年間の推薦入試の志願者数をプロットしたものですけど、右端が今年ですね。今年60人に達したということは、単純に2倍の競争率になったわけでございます。過去を見ても、18人あるいは28人が定員の時代もありましたので一概に比較はできないにしても、募集

人員に対する関心の高さからしますと、この推薦入試の志願者数というのは歯学部の人気、不人気といったことも、本学の人気があるかどうか、そういったことを占うのにかなり有力なバロメーターになるのではないかと考えています。



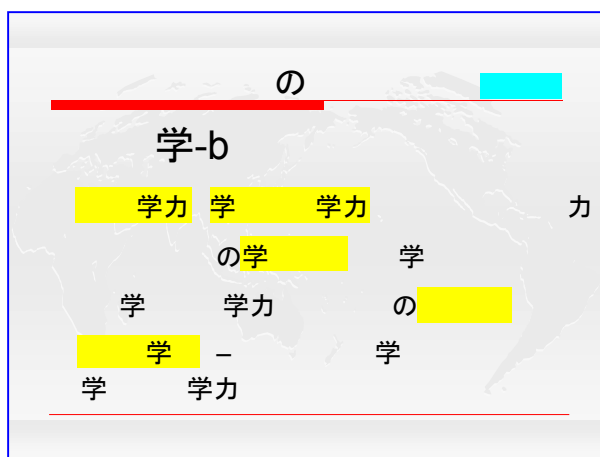
過去10年を見ても、定員の2倍というふうにはなかなかなくて、若干多いという程度で推移しており、平成20年度には1名定員割れをおこしています。このときが、「これはただならぬ時代が来るぞ」ということの前触れだったわけですね。そこでいろんな手を打ってきたわけでございますけれど、先ほどの授業料値下げも効いたのか今年はドーンと増えて、推薦入試は公募と指定校と両方やったこともあるのですけれど、注目すべきは京阪神からだけではなく、従来よりも地域が広がっている、他府県、遠方の地域からの受験生が増えているという点も、一つ言えるのではないかと気がいたします。

平成22年度からの事業計画

○教学の重点計画 a

今までやってきましたことに加えて、平成22年度からの重点計画として、さらに力を入れようとしているのは次の4つのことです。まず一つは「募集ブランド力」で、これは5つの力の中に入っています。1番目に入っています、募集ブランド力の向上です。言葉を代えれば、入試倍率のアップということです。文科省は、入試倍率が2倍以上というのを一つの目安としており、2倍以下であれば定員割れと同じこと全入と同じことだと言うのですが、私は3倍欲しい。3倍以上の入試倍率いうところに目標を置いております。

やっております。



それから、「カリキュラムの学年制化」。これはもう少し2, 3年先になりますと、カリキュラムを学年制をもって学年ごとに到達目標を決めて、あるいは留年する場合でも各学年で到達できなかったら留年するという形にしないと、上にばかり5年、6年で不合格者というか留年者が溜まった場合には2年しか同じ学年に在籍できないのでこれは退学にかかわる問題になってきますので、やはりもっと低い学年から徐々に絞っていかないといけない。3番目は、4学年末に学力点検を行い、さっき言いましたようにCBTの1回合格を目指します。とにかく1回で合格すれば世間に出しても恥ずかしくない実力を持っているという証明になります。再試でこれに通っているようでは、この段階ですでに国試の方もかなり厳しいと判断しなければなりません。

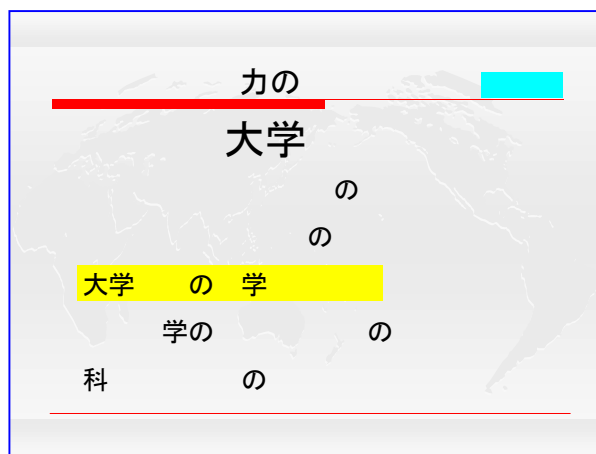
それからもう一つ、これにかなり期待していますが、100周年に関連して5年、6年を天満橋の同一学舎で教育したいと。これは先生も近くに大勢いますので、基礎の先生が天満橋に来てもらい、なんとか6年生を国家試験までできるだけ先生の監視下に長く置いた状態でバトンタッチする。あるいは下の学年からだんだんお尻を叩かれて押し上げられるという、そういうふうな5年、6年の一貫教育です。私は、これは非常にメリットがあると思ってしまして、後で述べます100周年の記念事業の中にそういう教育施設の増築を加えてもらっています。それから病院でも、症例も増えますので一石二鳥か三鳥ぐらいがあるというふうに思っております。しかし、楠葉は楠葉で、基礎教育あるいは基礎実習はそちらでやるということには変わりはありませんけれども、これで学士力がアップすれば、これも

国家試験の合格率を上げるのに直結していくのではないかと思います。

そういうふうにしますと、入学時の学力をもとに共用試験から学士試験、国試合格率アップまで一連の流れの中で教育力を高めていくことができ、確実に大阪歯科大学の「大学力」というのはアップするのではないか。この過程をよく検証しますと今、国試の合格率が1位、2位、3位にある大学というのは、ほぼそういうふうな道を経てきています。経てきているのが少し早かったか遅かったかということだけであって、今はくっきりと二分化されつつあるといいます。将来、大学の淘汰に向け耐えていくためには、この道は、私は避けて通れないのではないかと考えております。

○大学院の充実が“鍵”

次に、大学院。私は大学院を充実させることが、ひいては大学の持ついろんなパワー、研究のパワーだとか、教員の資質向上だとかの鍵を握っていると考えており、大学院を中心とした人材育成が急務になっています。



そういう意味で、教員の採用・昇任基準について規程を改正して、大学院修了者を条件として基準をきちんとクリアしていないと教員になれない、あるいは昇任できない、上へ上がれないというふうに厳格に規程をつくりました。教員にあまりに大きなばらつきがあった場合には、そこで教えられる学生さんもなかなか向上しない、すなわち教育力がアップしないということです。大学院の充実については、文科省がだいぶ後ろから支援してくれています。大学院生の比率を倍増せよということで、若い人ばかりじゃなくて社会人で

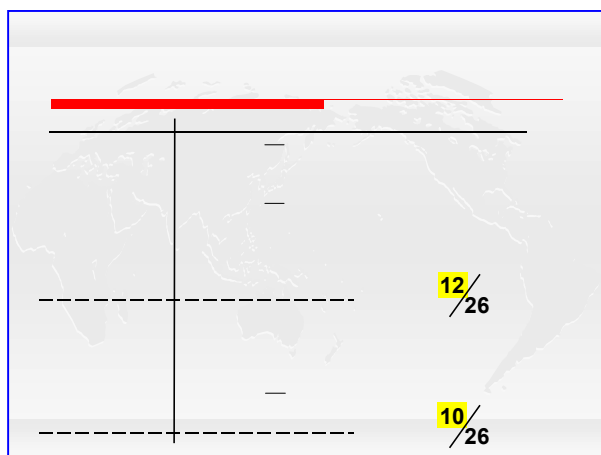
も、年齢の高い人でも入れた方がいいとか、あるいは大学院をもっと社会に開放すべきだというようなこともいわれ、大学院倍增計画、量的整備ということの政策の一環にもかなうことであります。

本学は、募集定員の半数をちょっと超えたぐらいしか大学院生が集まっていないということは、大学院を修了してから大学で教員になってくれる人が少なくなるということも表しているわけですね。それから、本学の海外留学をできるだけ奨励するということもネックとなっているかも知れません。帰国した後、どうも有給採用ができないから、下手に留学しても帰ってきてから浪人になるようでは行く気がしないという人もあるようですね。正月のテレビ番組を見ていますと、近年、日本の若者で海外留学をしたいと熱烈に思う人が全体的に減ってきているようですね。なぜ減ってきているのかということが、もう一つわからない。それに対して、中国とか韓国では、アメリカが中心、ヨーロッパが中心ですけれど、日本へもどんどん留学しに来ている。日本は30万人も、補助金を出すなどして留学生を受け入れているのに、日本から外へ出る人が非常に少なくなってきた。本学でも、私たちが学生であった時代から思うと、実際海外で勉強している人が非常に少なくなったという印象をうけます。

それから先生方には、科学研究費、外的資金の補助金等の申請を義務づけると、そういうことをやりたいというふうに思います。

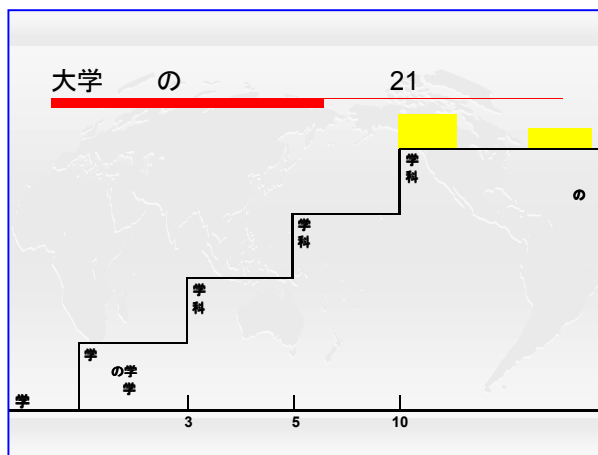
○教員のキャリアパスの具体化

この表は、先ほど言いました、欠員になる教授の欠員数を表しています。



今、2010年ですがこの6年間に、今教授は26名の主任教授がいるわけで席があるのですが、その26名中12名の先生が入れ替わるということになります。すぐにすると、後継のよい候補者が見つければいいですが、そういうことに不安を残します。さらに、5年後には10人ほど、併せて22名の教授が今後10年間に出去してしまうということで、これは今から対策を考えておかないと、そう簡単に一朝一夕に増やせないということになるのかと思います。

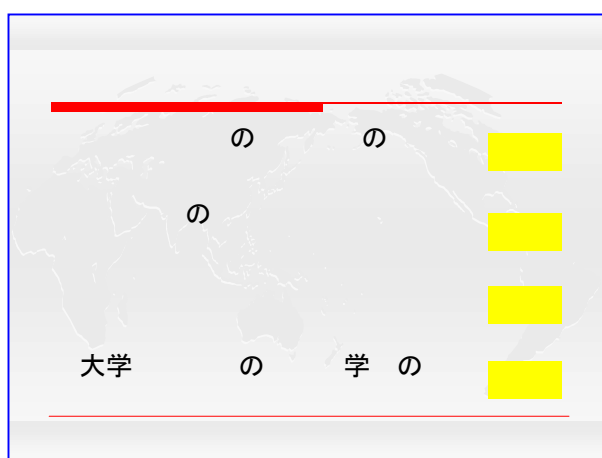
それから去年、平成21年度に実施というか達成したのが「教員のキャリアパス」です。



このキャリアパスの階段を上っていくのに、ただ単にポストが空いているからというのではなくて、それぞれの研究論文の数とか、博士の学位とか、研究補助金に採用数とか、教育研究歴とかそういうものの一定の資格要件がないと、いくら上が空いていても、席が空いていてもなれないというふうにしているわけですね。逆に言えば、この横軸の年数に示したように、助教になって3年後に講師になれる、5年経ったら准教授になれる、10年経てば教授になれるというふうに、がんばればキャリアアップが可能なわけです。しかも、教授選で強力なライバルがいた場合、どちらか一方が選ばれ一人は敗れてしまうということになりますと、これはその後の人生が狂ってくるので同じ資格要件を備えて優れた人が2名いた場合、両方もが教授になれる道筋も必要だと考え、これはもう実施できるようになりました。

教員任用については、職位ごとに資格基準となる学術論文数を明確に定めています。例えば教授になるためには、一般教育系、基礎系、臨床系ごとに論文数が

決まっています。臨床系の場合は20編以上でそのうち英語の論文が10編以上、臨床論文5編以内、基礎系の場合は20編以上でそのうち欧文が10編以上というふうに、この基準をクリアしている人しか、どんなにポストが空いていても教授にはなれません。それぞれの准教授にも、講師にも、助教にも、そうした明確な基準が設定されており、基準をクリアしていれば複数のポストに挑戦できます。

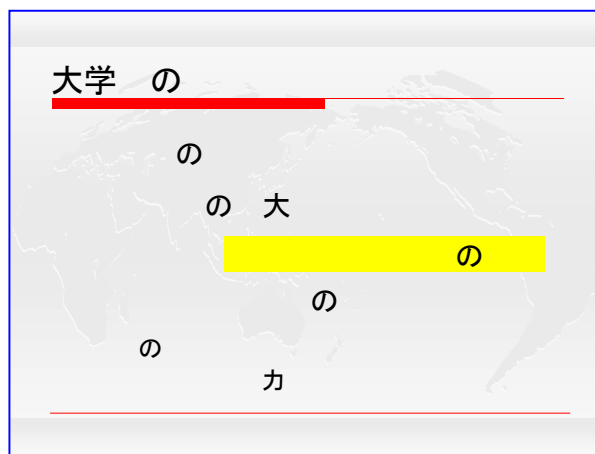


そういった形で教員人材を育成したい。教員にとってのキャリアパスへの意欲を増すということで、任用基準の明確化と資格基準の一本化を図るとともに、新しく専任教授という制度をつくり、今その教授選の途中ですけれど、さっそく人材を登用すべく進行しています。それから、大学院修了者で海外留学経験者を特別に教員として採用できる規程もできています。これらの規程はすべて、もう教授会、理事会で承認されましたので実施の段階で、いつでも実施できるということです。これから10年後には、この新しい任用制度によりだいぶ人材が満ちてくるというか、増えてくるはずでございます。

○大学院増強計画

大学院の増強計画もいろいろあるのですが、どうしても院生が増えない場合、私は授業料を少し引き下げてでも大学院生を増やさなければならないと考えています。一方で、大学の入学定員が減らされる方向にどんどん進んでいるわけで、それがよしんば減らされても、逆に大学院生がどんどん増えていけば、これは結構、両方でもって私学経営が成り立つのではないかと。創立120周年の東京歯科大学が、本学と決定的に違う

ところは大学院の募集定員がすこぶる多い、多いといえますか、基礎系でも大学院生が非常に大勢詰めかかっていますね。どうしてあんなに差が出るのだろうか、東京歯科は1学年34名もいるようですが、本学はその半分でございますので、だいぶ開きがあると。

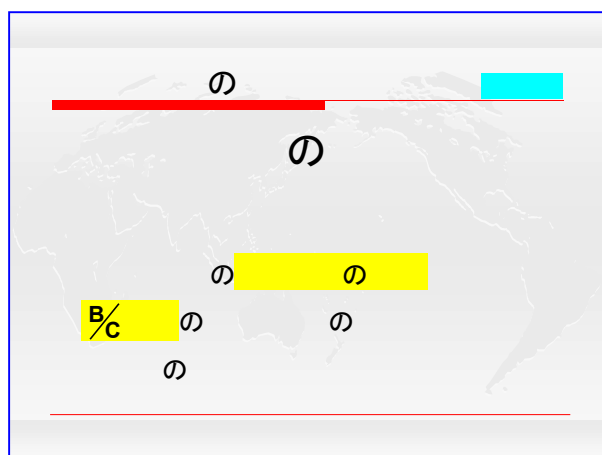


文科省が進めているのは、大学院といえば、なにも博士課程だけに限ったものではなく、専門医コースの課程があってもいい、それから2年制の修士課程というふうに大学院の形態や内容を広げてきています。これなら専門学校を出た衛生士さん、あるいは技工士さんも大学院へ行ける。本学には、それらを全部受け入れるだけの十分な設備が備わっております。中央研究所にも、立派な施設・設備が揃っております。ただ、本学は人がそこへ満ちていないということです。ですから、それを私は、大学院生を減らさないという努力とともに、増強面にも柔軟に注力すべきではないかと思っています。

○附属病院の改革に向けて

財政改善にも課題はいくつもありますが、今日は時間の関係もありますし、病院の改革に関しては担当の理事の先生に任せてお願いしてあるわけでありすけれども、本学はやはり病院をもう少し考えれば非常に有利な立地、ロケーションにありますし、もっと今の状況よりも成果が、収支改善の健全経営が可能になると、私は、これは可能であると思っています。とにかくそれには各要因を分析しそれぞれの収入を増やす努力、こちらの方をもうちょっとがんばってもらいたい。あまり経費ばかりを見直すことをやっていたのではみんな働く意欲もなくなるので、何かもっと増収計画

はないだろうか、BバイC（benefit/cost）考慮の支出というか、こういう時代ですから費用対効果ですね、BバイCを考慮しないとこれはまた野放図な経営になってしまうではないか。そういうことはやっぱりそれらの数値が、収支表が1年に1回だけしか集計できないという状況では、これはどんぶり勘定でしかできないという感じになるのではないか。そういうことで、各部署の収支改善策とか、いいアイデアを提案して実行していくことをやれば、そしてそれらを積み重ねていけば、ここは日本でも有数の歯科大学病院になれると考えています。



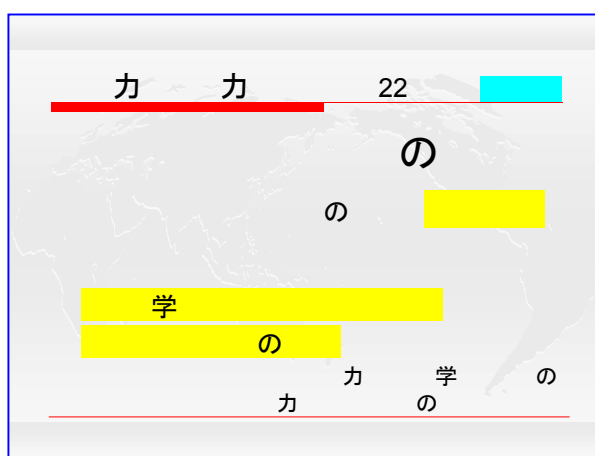
今ちょっとデータはもっていませんが、一時、日本で東京医科歯科大学に続いて2番目に患者数の多い大学ということで本学が位置づけられていた時代があるのです。今は、ちょっと患者さんは減っていると思いますが。そういった患者さんはどこでも、方々から呼べば来てくれるのではないかな。いい先生が揃っていれば、あるいは長時間そこに先生がいらっしゃれば、どんどん患者さんが来てくれる条件にあるのではないかなという気がします。

そこで、よくがんばってくれたところには、愛知学院のように報奨制度とか顕彰をすべきではないかなというふうに思っています。

○教員評価の実施

それから、教員評価を臨床も附属病院も入れて、実施し始めました。昨年からは、平成21年の4月から、今年で2年目になるわけですけど。一応、昨年はトライアルとしてやっているのですが、その実施結果によっては、今年は報奨とか顕彰をするべきであって、あんま

りそれを抑える方向といいますか、下げる方向にあまりあら探しをしない方がいいのではないかと考えています。しかし、そういうふうには報奨をしたり顕彰したりするにもデータがないとできませんので、客観データをできるだけ集めるようにしたい。教員評価と学生の授業評価、それから先ほど言った5、6年生の病院一貫教育のための講義室と自習室の増設、これを私は喫緊の問題に位置づけたい、単なる重点ではなくて、そのように思います。



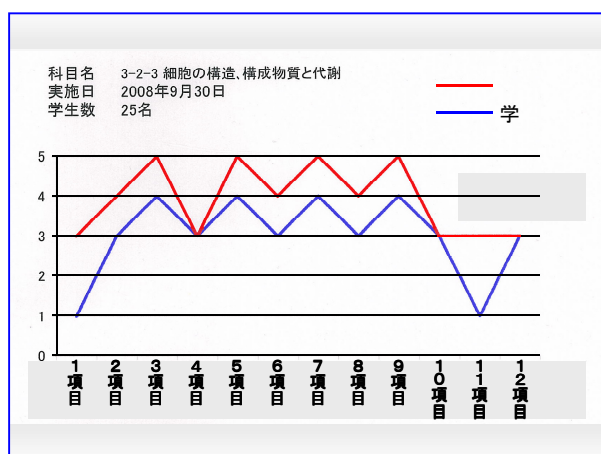
学					

昨年も出しました教員評価は2年目に入っています。総合評価が「教育」「研究」「臨床」「学内活動」「社会活動」「目標・態度・意欲」の6項目で、重み付けも勘案して総合評価点数が135以上だとAとか、あるいは58点以上ではBとか、Bはまずまずということですね。実際はS、A、B、C、Dの5段階で評価します。それをさらに一目でわかるようにレーダーチャートにしますと、この重点のところは臨床、教育、研究の3項目で、臨床をあまりやれないような基礎の先生とかそういう

人は臨床を外して残りの5つでもって評価した点数の合計でABC評価するかたちをとっており、その際自分は重点的にこれとこれを特に評価して欲しいということも選択できるようになっています。

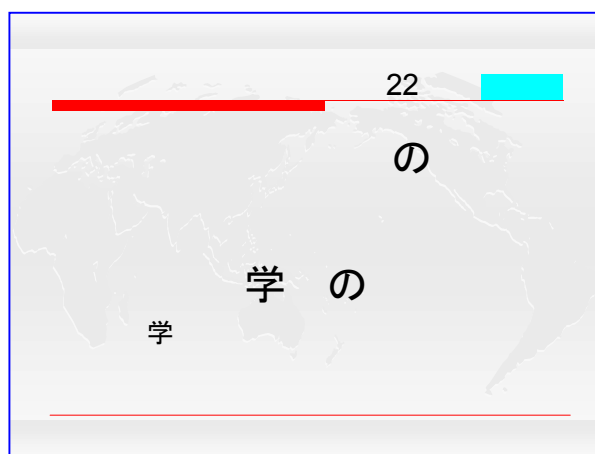
学		
学		
5	4	3
2	1	

もう一つ、やはり、この教員評価には授業評価を加えて初めて一人前だということで、講義に対する学生からの5段階の評価方法、これが案外学生も非常にまじめに回答し、評価としての的を射ていることがわかってきました。先生自身が自分で自分を評価した結果と、学生が評価した結果が合致しているところとしていないところ、合致しているところはいいのですが全然していないところはちょっと、その間に齟齬があるように思われます。これは今のレーダーチャートにはまだ入れておりませんが、その先生だけに見てもらおうという形でフィードバックしています。方法はそれでいいと思っています。

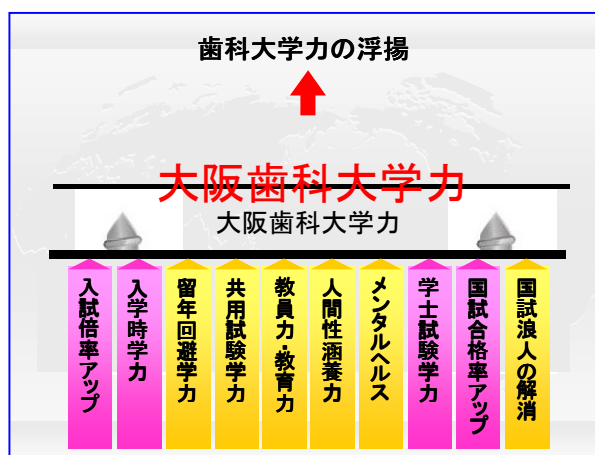


○その他の事業計画

この情報開示への対応も、7つの事業計画のところに入っておりますけれど、これも担当の委員会があって、今それを分析中でございます。両専門学校についても、委員会で改善策を検討するとともに実施段階にあります。



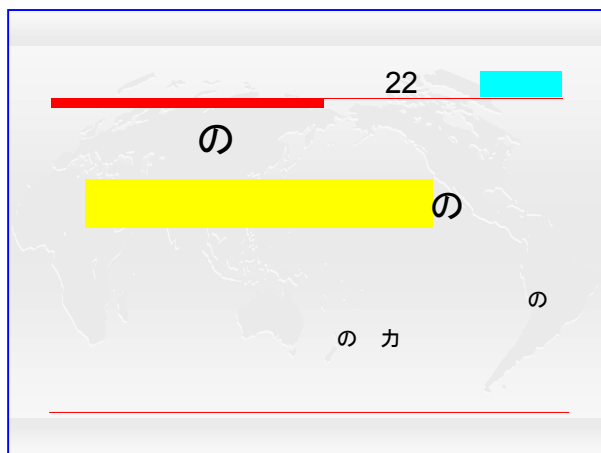
以上、最初に示しましたこの図にありますように「大阪歯科大学力」をいかにして浮揚させるか、アップさせるかそういうお話をしてまいりました。すべての事業が、この「大学力」という言葉につながっており、今後とも「大阪歯科大学力」アップに向けた取り組みを図っていきたいと思っています。



創立100周年記念事業の推進

最後になりましたが、特別の重点計画というのを立て、いよいよ、我々が目指す「創立100周年記念事業」を具体化させていく年になりました。ずっと全国のいろんな大学、4年制大学も見えてきて、やっぱり100周年

の記念事業をやった、あるいは100周年を超えた大学というのは、いろんな誇りだとか、自信とか、社会的な高い評価だとか、そういったものが必ずあります。



ですから、本学もそうした伝統ある大学へ仲間入りするわけですが、なんとかしてあまり費用をかけずに、しかし立派な100周年記念事業を推進すべきであろうと思っております。記念式典は、本学が1911年に創立しましたから、そこから100年目の2011年の11月11日。いい年（11年）、いい月（11月）、いい日（11日）に記念式典を行い、同窓会の会員大会を11月26日に予定しています。

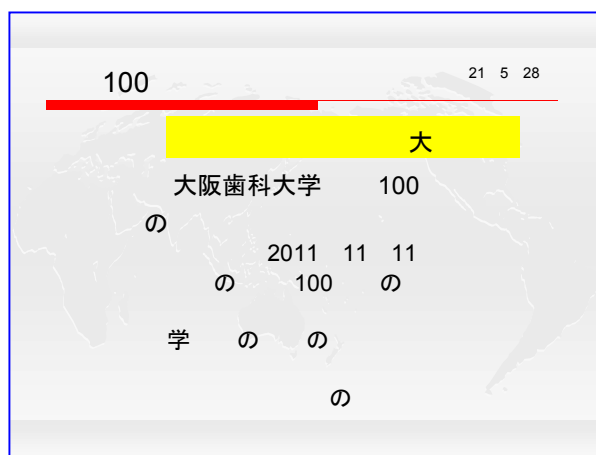
創立100周年に向け、大学は「誇りと誓いー蓁々たる大樹へ」を標語にしました。蓁々（しんしん）とは、「緑の葉っぱが豊かに繁る、枝が増えて、豊かに繁る様」という意味で、これからの我が大阪歯科大学の進む方向を示しており、ちょうどいい目標ではないかと思えます。



記念事業については、初めは、教授会と理事会に分

けてスローガンとかテーマとか事業内容の項目などを検討していただきまして、それらを合わせてこの企画委員会で集約してきました。

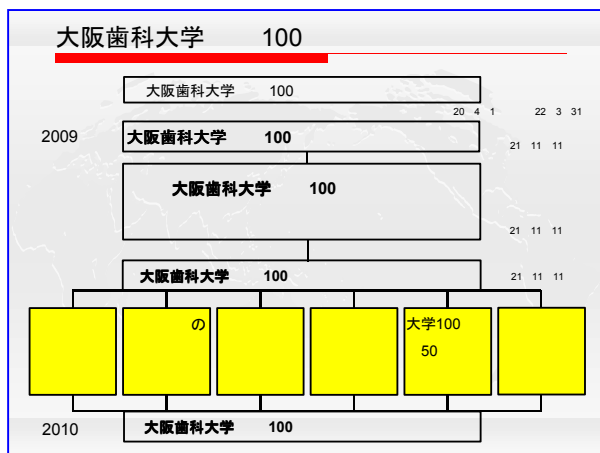
ここで決まりましたことは、今言いました100周年のスローガンとして「誇りと誓いー蓁々たる大樹へ大阪歯科大学創立100周年」であります。また、100周年記念の事業の柱として次の7項目を決めました。



①「記念式典」を行う。②「大学100年史、大学院50年史」を出版する。③「公開講座・記念講演会」を記念式典と相前後して行う。④「本学発祥の地への記念碑設置」は、本学の校名が明記された古い地図が見つかり、現在の場所と照合のうえそこに記念碑を建ててはどうかということです。それから先ほど言いました⑤「天満橋に講義室・自習室を建設」して5年、6年の一貫教育を病院で行う。学士教育力と国家試験の合格率を上げ、さらに病院の収益も上げる、そういうふうなことを一石二鳥でやれないかと。それから⑥「教員人材育成制度の創設」、これはもう2年以上留学した人の特別採用制度を規定化しましたから、今後は除いてもいいかと。⑦「記念事業募金」は、全国の同窓の方、あるいは本学のいろいろなクラス会とか記念会をやっている方に呼びかけて、それでお願いするという形になろうかと。そういったことを決めてまいりました。

現在、企画委員会が一応は役目を終えて、昨年11月11日付で「記念事業常任委員会」というものを立ち上げました。同時に、「記念事業準備グループリーダー（責任者）会議」というのも立ち上げました。その下に、先の教員人材育成制度を除く6つの「記念事業準備グループ」を発足させ、これをさらに「記念事業実行委員会」へ移していくということに今年からなります。

もう、なんと言っても来年ですからね。ちょうど1年半ぐらいしかないわけですから、それに向けて大急ぎでやっていかないといけない。



記念式典・祝宴・慰霊祭の柱、創立地への記念碑設置、記念事業募金の制度をきちんと作ってどこに募金したかわかるようにして募金を行う。天満橋に、講義室と自習室を建設する。それから出版ですね、100年史、50年史を出版する。さらに、記念公開講座・記念講演会を開催すると。この6つに分かれて、全教授、もちろん准教授以下教職員もすべて関与するのですが人選もほぼ決まっています、この新年からそれぞれグループごとにやっていっていただく。そして、またそれを統合した常任委員会で評価しながら、できるだけ予算の面も考えながら進めていきたい。

第22回日本歯科医学会総会概要

歯科 学

学 大阪

大阪

それから今日はもう、言わないつもりでございましたけれど、100周年の翌年の11月、よほど11月に縁があるようですが、2012年11月9日から11日にかけて25年ぶりに主管校として、歯科医学会総会をインテッ

クス大阪と国際会議場、リーガロイヤルで行うことが決まっています。

以上が、大急ぎで、最後は時間が足りなくなってまいりましたけれど、100周年記念事業はこういった方針でもってやっていきます。なにぶんにも、今までの我々学内の教職員だけで考えた計画でございますので、これからまた、いろいろと先生方、あるいは名誉教授の先生方からアドバイスといいますか、ご提案、ヒントをいただきましてこれを修正しながら、みんなの100周年でございますので、これは是が非でも日本全国、あるいは国際的にも隅々まであらゆる広報の手段を用いてPRしたいと考えています。

私たちは、この機会を逃しますと、二度と目の黒いうちはこういった大きな記念式典はもう開けないのですから、この機をとらえて大学を浮揚させアップさせることができるか、あるいは下降気味になってしまうか、その節目のときを迎えているわけであります。大学は、もはや伝統があるというだけでは生きていけない時代になってきています。こういった苦境の時こそみんなで力を合わせて一致団結し、そして最後はやはり、本学を母校と仰ぐ同窓の先生のお力が、本当に最も大きなパワーになるような気がいたします。

どうもご静聴ありがとうございました。

(平成22年1月5日)



平成21年度日本歯科医学会会長賞 川添堯彬理事長・学長が受賞

川添堯彬理事長・学長が、平成21年度日本歯科医学会会長賞の受賞候補者として日本補綴歯科学会から推薦を受け、日本歯科医学会理事会において審査の結果、このたび会長賞受賞者（教育部門）に決定しました。その授賞式が、平成22年1月22日に日本歯科医学会評議員会において執り行われ、他の6名の受賞者とともに川添堯彬理事長・学長も出席しました。



学位（歯学）授与報告

馬場 祥光 乙第1542号 (平成21年12月22日)
Expression of histone H3, p53, cyclin D1, and cyclin B1 in oral mucosal lesions (口腔粘膜病変におけるヒストン H3, p53, サイクリン D1 およびサイクリン B1 の発現)

岩本 一哉 乙第1543号 (平成21年12月22日)
Changes of plasma cytokine levels in ODUS/0du (ODUS/0du の血漿中サイトカインレベルの変動)

海外留学経験者特別採用制度実施へ

本学の大学院博士課程修了者について、海外留学経験を教員として特別採用する制度が規定化され、9月24日から施行されることになった。この特別採用制度は、大学および大学院教育の活性化、教員の質の向上ならびに人材育成を図ることを目的としている。

応募資格は、本学大学院を修了し、海外の大学もしくは研究機関で2年以上の留学経験があり、満35歳以下であることです。講座の定員外の教員（助教）として特別に採用されます。任期は5年で、再任はありません。所属は、研究領域を考慮し学長が決定します。

（お詫びと訂正）

前号(第155号)の「第41回全日本歯科学学生総合体育大会」の部門別成績について下記の通り訂正します。空手道部ならびに関係者の方々にお詫びいたします。

（誤）「・・・剣道が3位と健闘した。」

（正）「・・・剣道と空手道が3位と健闘した。」

人 事

教員採用

口腔インプラント科 助教 新井 是宣
H. 21. 10. 1付

昇 任

化学教室 主任教授 藤原 眞一
有歯補綴咬合学講座 主任教授 田中 昌博
口腔解剖学講座 講師 中塚美智子
以上 H. 21. 10. 1付

大学院教員任用

大学院教授 田中 昌博
H. 21. 12. 1付

職員採用

附属病院 看護師 高来 美幸
H. 21. 12. 1付

依願退職者

附属病院 看護師 重松まゆみ
H. 21. 12. 31付

委 嘱

学生部委員会委員 藤原 眞一, 田中 昌博
以上 H. 21. 10. 14付
カリキュラム委員会委員 武田 昭二, 岡崎 定司
以上 H. 21. 12. 9付

入試委員会委員 武田 昭二, 岡崎 定司
以上 H. 21. 12. 9付

健康管理委員会委員 福島 久典, 小谷順一郎
以上 H. 21. 10. 1付

大阪歯科大学創立100周年記念事業常任委員会

委員長 川添 堯彬
副委員長 村上 勝, 新田 孟
三谷 卓, 岡 邦恭

常任委員 田治米保夫, 橋本 猛伸
伊達 洋彦, 下村錢三郎
白神 進, 豊田 紘一
田中 昭男, 大浦 清
堂前 尚親, 神原 正樹
諏訪 文彦, 覚道 健治
福島 久典, 小正 裕
森田 章介, 小谷順一郎
林 宏行, 上田 雅俊
末瀬 一彦, 田中佐和子
中村 廣志, 前野 隆
東野 隆, 松村 誠一
以上 H. 21. 8. 6付

大阪歯科大学創立100周年記念事業準備グループ
《大学100年史・大学院50年史》

リーダー（責任者） 田中 昭男
メンバー（委員） 橋本 猛伸, 西川 泰央
森田 章介, 川合進二郎
松本 尚之, 武田 昭二
田中 昌博

事務局（事務担当） 田中佐和子, 安藤 孝幸
伊藤 淑子, 松村 誠一
西嶋 耕治
以上 H. 21. 11. 11付

大阪歯科大学創立100周年記念事業準備グループ
《講義室・自習室》

リーダー（責任者） 岡 邦恭
メンバー（委員） 伊達 洋彦, 田中 昭男
小正 裕, 豊田 紘一
池尾 隆, 森田 章介
山本 一世

事務局（事務担当） 中村 廣志, 西堤 京子
三木 慶一, 大上 登
田中 修
以上 H. 21. 11. 11付

大阪歯科大学創立100周年記念事業準備グループ
《記念事業募金》

リーダー（責任者） 三谷 卓
メンバー（委員） 伊達 洋彦, 堂前 尚親
神原 正樹, 森田 章介
小谷順一郎, 岡崎 定司
藤原 眞一

事務局（事務担当） 中村 廣志, 前野 隆

中尾 昌彦, 安藤 孝幸
以上 H. 21. 11. 11付

大阪歯科大学創立100周年記念事業準備グループ
《本学発祥の地・記念碑設置》

リーダー（責任者） 新田 孟
メンバー（委員） 覚道 健治, 下村錢三郎
林 宏行, 上田 雅俊
清水谷公成, 山本 一世
田中 昌博

事務局（事務担当） 田中佐和子, 安藤 孝幸
森田 恭生, 松村 誠一
以上 H. 21. 11. 11付

大阪歯科大学創立100周年記念事業準備グループ
《記念式典・祝宴・慰霊祭》

リーダー（責任者） 村上 勝
メンバー（委員） 覚道 健治, 白神 進
豊田 紘一, 小谷順一郎
大東 道治, 清水谷公成
上田 雅俊, 末瀬 一彦

事務局（事務担当） 中村 廣志, 東野 隆
牧谷 弘幸, 高須 聡
今道 裕之, 松村 誠一
以上 H. 21. 11. 11付

大阪歯科大学創立100周年記念事業準備グループ
《公開講座・講演会》

リーダー（責任者） 諏訪 文彦
メンバー（委員） 田治米保夫, 大浦 清
福島 久典, 堂前 尚親
神原 正樹, 佐ノ木幸夫
岩井 康智

事務局（事務担当） 東野 隆, 池田 良則
牧谷 弘幸, 東 真一郎
種坂 隆志
以上 H. 21. 11. 11付

講師(非常勤)委嘱

歯科衛生士専門学校 臼本 鏡子
H. 21. 10. 1付

歯科衛生士専門学校 村田 圭美
H. 21. 11. 1付

あとがき

－余談－

少し古い話になりますが、平成16年に「私立学校法」が一部改正されています。平成16年5月12日に法律の一部改正が公布され、17年4月1日付けで施行されたのですが、その趣旨は「学校法人が近年の急激な社会状況の変化に適切に対応し、様々な課題に対して主体的、機動的に対応していくための体制強化」ということであり、具体的には、理事会および理事、監事、評議員の権限、役割分担を明確にすることにより、学校法人の管理運営制度の改善を図りなさいということと、もう一つは学校法人の公共性を担保し、説明責任を果たす観点から財務情報の公開が法的に義務付けられたということです。要は、社会の信頼に足る学校運営をなささいということであります。

そうした法改正がなされた背景には、ちょうど国立大学が独立法人化され、予算を含めた大学の管理・運営において国に頼るだけでなく、自助努力が求められるようになったことと重なっています。また、多くの大学で科学研究費等の公的資金の不正使用が問題となり、国公立を問わず大学の管理体制の杜撰さがクローズアップされたことも記憶に新しいところです。さらに、法改正趣旨の「急激な社会状況の変化」という文言にあるように、バブル崩壊後の不安定な経済状況下でのいわゆる経済のグローバル化ということが大きく影響しています。

この法改正とともによく使われるようになった言葉に「ガバナンス」があります。直訳すると、「統治・統制」あるいは「支配」「管理」といった堅い言葉になりますが、元々は、アメリカの企業経営における株主重視の考え方、すなわち顧客の信頼を得るために「企業はどうあるべきか」という問いから使われ始めた言葉です。それが、企業の不祥事を防ぎ収益力を上げることを目的とした企業統治という考え方に発展していきます。さらに、そうした組織機構を補強するために、コンプライアンス（法令順守）であるとか内部統制システムといった概念も生まれてきました。そうした概念が、経済におけるグローバル化の波とともに国際的な企業間競争にある日本の大企業にも波及し、そしてついに大学にも組織原理としての「ガバナンスの確立」

ということが取り上げられるようになってきました。

そして今、少子化、18歳人口の減少などの状況が深化する中、国公立を問わず、すべての大学で自らの大学を継続していくために、不祥事を未然に防ぎ財政基盤を確立させるための組織原理を模索している状況です。大学も、社会の中の1組織としてその社会的責任を問われる時代になってきています。そうした認識が大学人にも必要とされています。

私立大学にとってはさらに厳しい時代を迎えています。受験者人口の減少に加え長期にわたる経済的不況が拍車をかけ、定員割れの大学が続出しています。その結果、多くの大学が財政を悪化させてきています。しかし、実は財政悪化はどの大学でも10数年前からすでに始まっていました。なぜなら、財政悪化の最大要因が、経済不況にともなう低金利政策に起因しているからです。

私立学校は、自前の資産で学校を運営していくことが義務付けられています。したがって、どの学校もある程度の資産を保持しています。その資産は定期預金等で運用収入として毎年、一定の収入を保証してきました。ところが、経済不況による低金利政策が続いているため、どの学校も資産運用収入が一気に減少しています。特に、全収入に占める資産運用収入の比率が高いところは、急激に財政を悪化させました。皆さんもご存知のように、昨年マスコミをにぎわせた複数の大学で発生した数十億～百億円単位の莫大な資産損失報道も、この資産運用収入の減収分を投資などにより安易に回復しようとしたためと推察されます。

収入を得るのに安易な道などありません。地道に本業に努力するしかありません。社会からの信用・評価がすべてです。その意味では、企業と大学に区別はありません。本業とは何なのか。これを問い直すことがガバナンスの確立、組織体としての共通理解を確立させる唯一の方法です。

大阪歯科大学広報 第156号

発行日 平成22年1月31日

編集発行 広報委員会

〒573-1121 枚方市楠葉花園町 8-1

電話 072-864-3111